

子どもは類像性の程度が異なる音象徴性をどのように理解するか：日本語オノマトペにおける意味的区分を用いた実験的検討

本研究の目的は、類像性の程度の異なる語彙が言語獲得期における子どもにどのように理解されるのかを、日本語におけるオノマトペの持つ音象徴性を事例として明らかにすることである。類像性とは記号の形式が対象を有縁的に表す性質を指すが、特に本研究では語における音と外界の事象との関係を表す語彙的類像性に着目する。日本語におけるオノマトペは言語の音と外界の事象とが有縁的関係を持つ典型的な事例のひとつであるが、近年、このような語の持つ音象徴に関する理解が子どもの初期言語獲得にとって大きな手掛かりとなりえることが幾つかの研究で報告されてきた (Imai et al., 2008 等)。これらの研究の結果は子どもが言語的知識を構築していく際、語と指示対象との恣意的な関係を越え、自身が知覚した音と語の意味とを柔軟に結びつけながら獲得を進めていく可能性を示しており、文法や意味の構造に領域一般の認知能力からの“動機付け”を考える認知言語学的観点からみても重要な示唆であるといえる。

しかし一方でこれまでの研究では日本語オノマトペのような他の一般語彙に比べ明らかに高い類像性を持った特定の語とそうでない語の間での二極的な比較はされてきたものの、その中に存在する類像性の程度の差が子どもの語の理解にどのように影響を与えるのかについては十分に議論されてきていない。この問題を考える際、日本語におけるオノマトペの体系は特に興味深い性質を持っている。Akita(2008)は、日本語のオノマトペにおける擬音語、擬態語、擬情語はこの順に類像性の程度に差があることを指摘しており(The lexical iconicity hierarchy)、さらに Iwasaki et al(2007)は、この階層性は子どもの言語獲得の順序と対応しているのではないかという提案をしている。これらの提案は類像性と言語獲得との関係を考える上で大変興味深いものであるが、未だ質的な観点からの示唆に留まり実証的に検証されてきたわけではない。そこで本研究では、子どもの音、態、情それぞれを表す音象徴性の理解に差があるのか否か、実験的に検証した。

実験ではまず刺激の選定のために、日本語における擬音、擬態、擬情語を角岡(2007)よりそれぞれ 13 ずつ計 39 選び、それぞれの事態を表す動画を作成した。これらの動画は成人母語話者に対する評定実験により、こちらが想定した音と対応していることが確認された。更に評定実験の結果から音と事象との合致度が高い順に擬音語、擬態語、擬情語それぞれ 6 ずつ計 18 の動画を選び、実際の実験で用いる基準刺激とした。次に子どもに対する理解実験を実施するため、評定実験の結果から基準刺激の動画に最も“合っていない”音に対応した動画を選び基準刺激とともにペアを構成した。更に子どもが既知のオノマトペに関する知識を利用できないようにするため、前掲 Imai et al.に習い、基準刺激のオノマトペの母音を規則的に変化させ新奇動詞を作成した(例:「ざぶ」→「ざびっている」等)。

子どもに対する実験には 3 歳(26 名)及び 5 歳(26 名)が参加した。子どもにはランダムに提示される擬音、擬態、擬情の事態に対応した 18 のペアを見てもらい、どちらが新奇動詞

で示される事象かを選択してもらった (図 1).

分析ではまず擬音, 擬態, 擬情それぞれの正答率を比較した. その結果, 3 歳, 5 歳ともに有意に 50%以上の正答率を見せた(音, 態, 情に対しそれぞれ 3 歳:.71, .67, .60; 5 歳:.78, .74, .86). このことは, 実験に用いた新奇動詞の意味を, 子どもはその語彙に含まれる音象徴性を手がかりとして推測できたことを示している. さらに, 月齢と正答率との相関を見ると, 擬音的刺激に関しては無相関に近い値であったのに対し擬態, 擬情的刺激には正の相関が見られた(相関係数はそれぞれ.11, .50, .41: 図 2 参照). この結果は擬音の音象徴に関しては初期からその意味について既に理解が進んでいるが, 擬態, 擬情的音象徴に関しては発達過程で音象徴性の理解が”進む”ことを示している.

本研究の結果は, 同じ音象徴性であってもその類像性の度合いによって比較的早い段階から意味の把握が可能なものと, また言語運用に触れて初めて理解が進む音象徴性がある可能性を示している. このことは獲得研究における音象徴の役割について, 単純に音象徴性のある/なしという二極的な議論でなく, 音と外界の事象との繋がりがどれだけ直接的であるのかどうかという観点から捉える必要があることを示している. さらに本研究の示唆する, 類像性の低い音象徴性の学習過程に関する問題は, 言語普遍性が強調されがちであった従来の音象徴語及び言語獲得研究においては殆ど議論がなされてこなかった興味深い観点であり, 今後新たな研究課題となりうると考えられる. (2000 字)

参考文献

- Akita, K., Gradient integration of sound symbolism in language: Toward a crosslinguistic generalization. In Shoich Iwasaki, ed., Japanese/Korean Linguistics 17. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Imai, M., Kita, S., Nagumo, M., Okada, H.2008. Sound symbolism facilitates early verb learning. Cognition 109, 1:54-65.
- Iwasaki, N., D. P. Vinson, and G. Vigliocco. 2007. What Do English Speakers Know about Gera-gera and Yota-yota?: A Cross-Linguistic Investigation of Mimetic Words for Laughing and Walking. Japanese-Language Education around the Globe 17: 53-78.
- 角岡賢一. 2007. 日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について. くろしお出版



図 1. 実験手続きのサンプル(擬音語に関するペア)

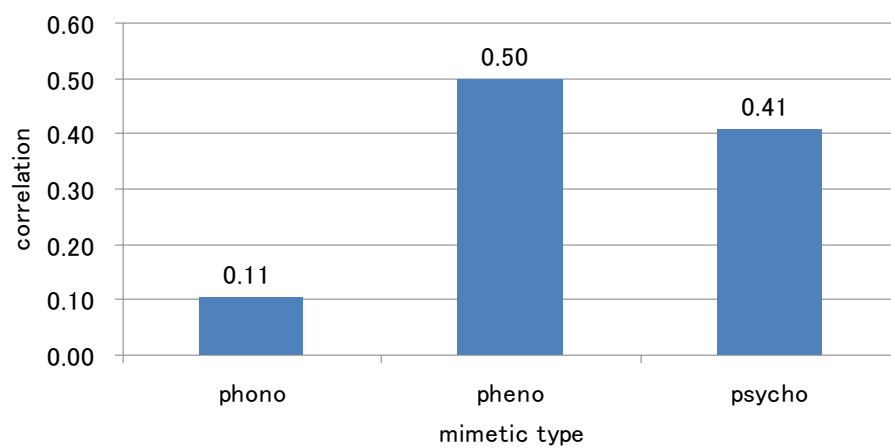


図 2. 月齢と正答率との相関